私と教育学

里 見　　実

研究室紀要 第41号 別刷
東京大学大学院教育学研究科　基礎教育学研究室
2015年 7 月

私と教育学

里　見　　実

■東京大学教育学部・教育社会学科に編入して

僕が大学に入学したのは1956年です。ちょうど戦後の政治状況が大きく変わり、学生運動が色々の流れに分かれていく直前の時期です。僕が東大へ来たのは、1958年かな。２年ぐらいたってからです。途中から転学をしたんです。ちょうど教育学部に教育社会学科ができた時です。教育社会学科ができて、何人か募集して、その時に千葉大学から編入という形でこちらに来ました。初めて学科ができて、進学者がいなかったんじゃないかと思いますね。僕は、ある程度エミール・デュルケームなども読んでいたからすっとつながりまして、まあ受けてみようかということで受けたら、受け入れてもらえたということになります。学生は４人採用になったのかな。でも２人病気をして、結局残って一緒に卒業したのは２人だけです。そのあと何年か遅れて、一緒に入った２人も卒業したと聞いています。ですから、学部生は２人だけだった。もう一人は伊藤介一（よしかず）くんという人です。その後、東京都に勤めたと思います。

ですから周りは上級生や大学院生で、事実上大学院のゼミにぽっと入っているような感じなんです。ゼミの内容は、調査と文献講読でしたけれども、どちらも大学院生の方が多い感じで。あとは四年生。四年生といっても、教育社会学はいませんから、史哲（教育哲学・教育史研究室）の四年生です。それから、他の学科や学部の人も来ていたと思います。

それで、最初の年はウィリアム・ロイド・ウォーナーを読んだのかな。それから、調査は川崎で「社会階層と教育」というテーマでやりました。清水義弘さんが指導教員です。１年目はずっとウォーナーだったと思います。２年目は何を読んだかな。デュルケームも読んだはずなんだ。それから、牧野巽さんの原書講読にも出、１年目にマーガレット・ミードを読みました。あとは川崎の調査とその準備。それが主です。

講義は、清水さんが『試験』という岩波新書（1957年）をちょうど出したばかりで、その中身を話してくれました。聞いていましたけど、これはあんまり面白くなかった(笑)。一応ちゃんと聞いてはいました。

熱心に聞いたのは、むしろ社会学科の講義だったかもしれません。日高六郎さん、それから青井和夫さんが小集団の研究。なかなか熱気のあるいい授業でした。それから高橋徹さんが態度、パーソナリティ、世論などについて講義していて、これが結構面白かったです。日高さんは、その後、私的にも師事するような感じになってしまったんですけれど。

その時は、むしろ社会学科の交友関係の方がやっぱり濃くて、今でも付き合っているけども、大沢真一郎のように、亡くなってしまった人もいます。和光大学の三橋修は会ったときときからずっとつるんでいて、大沢とはトリオの感じで一緒にいろいろなことに手を出してきました。彼らの周辺にも色々な人がいました。沖縄の新崎盛暉さんとか見田宗介くんとかね。教育社会学は二人だけでしたが、教育の史哲にも面白い先輩や同学年の友人がいてね、五月祭の準備だとか、ストライキ支援だとか、一緒に動くことが多かった。友人には恵まれていたのではないかなと思います。

■勤評闘争と学生運動

ちょうど編入した時期が勤評闘争と重なっていました。だから、やっぱり教育学部がどうしても渦の中のかなり重要な部分になるんですよね。デモにはよく行きました。ただ、僕は自治会活動には積極的には参加しませんでした。学生大会には２回に１回ぐらいは参加していたかな。学生運動、とくに東大生の学生運動には、なじめないものがあって、いわゆる活動家的な役割はしていません。だから、デモとか、ごく稀に国鉄などのストライキの支援に行くくらいで。

勤務評定が一番やっぱり大きいんですけれども、勤務評定が強行されて、教育委員会制度が変わり、道徳教育が特設化されて、本当に戦後の教育行政を根本から覆すような動きが次々に出ていた時代です。

大学生になった最初に、教育委員会法だったか何かで国会前に行って、警官に蹴散らされて、それが僕のデモの初参加で。だから、典型的なノンポリでした。ただ全教ゼミ（全国教育系学生ゼミナール）には、ちょっと力を入れました。三年生のときだったかな。横須賀くん、伊藤くんと一緒に大阪の全国大会に行ったんですけれども。横須賀薫くんとは同学年です。道徳教育の部会だったかな。大したことをしていないんだけれども、こちらも危機感があったから、かなり気合の入った問題提起をしたように記憶しています。国家に道徳を取り仕切られてはたまらない、という素朴な怒りのようなものが、原点にあったのでしょうね。

同じ頃教育学部で大学院までいった人としては、吉澤昇くん、横須賀くんがいます。あと、１年先輩で渡辺益男さんという、東京学芸大学の社会学の先生をされた方。それから、史哲は１年上だと結構いるんです。山田昇とか木下龍太郎とか、それから古山洋三ってご存じでしょうか。べ平連の中心的な活動家になって、早く亡くなった方です。あと、２年上が倉石庸ですね。１年上が、けっこう色々すごい連中がごろごろといたんです。僕らは圧倒されていたんだけど。僕らの年は、ちょっとお粗末でしょぼしょぼっていう感じで。「今年の三年生はしょうがない」と言われて。

当時の教育政策にたいする反対行動には、周辺の人たちはかなり精力的にかかわっていましたね。その後、文部官僚になって、教科書検定課長になった藤村和男っていう人がいるでしょう。彼なんかもそのころの活動家でね。彼らは、地域や学校現場に行って、そこの親や教師たちと色々議論したりしていたようです。まじめな活動家の人たちは、それをやっていました。僕はやらなかった。基本的には、図書館やその辺のたまり場で、ただノタノタしていただけ。それでも文部省へのデモだとか、そういう行動には、気まぐれな一般学生として参加していました。当時の学生運動のリーダーは、指導者気どりの男たちが多くてね、無意味にデモ隊と機動隊を激突させるわけですよ。もみくちゃになるということがよくありました。そんなわけで勤評闘争にもあまり深くは関わってはいません。学生運動で関わったのは、全教ゼミに行ったことぐらいかな。

■全教ゼミと教育運動の分岐

僕が最初に全教ゼミに参加したころは、学生運動は表立った仕方ではまだ分裂していませんでした。内部では亀裂が生まれていたのでしょうが、そんなことは知る由もありません。その後、めちゃくちゃに大変なことになりましたよね？　大学院に行ってから、もう一度全教ゼミを傍聴したことがあるんですよ。静岡大学でやったときだったかな。そのときはもう大変でした。怒鳴り合い、つかみ合い。「わあ、すげえことになっているんだな」という感じ。何が問題だったんでしょうかね。しかし全自連と全学連、両方の立場の人が来ていましたから、激突はしたんでしょうけれども、その頃はともかく一緒にやってはいたわけですよね。1961年の２月か３月だったように思います。

運営のイニシアチブは、おそらく全学連派が握っていたのだと思います。僕は、村田栄一をその時初めて見たんですよ。村田栄一という新米教師がゲストとして招かれて、教育実践無用論をぶつんですよね。「教室の中に自足して教育実践がどうのこうのと言っているのは自己欺瞞だ」というんですよね。学校は所詮は国家の権力装置である。そのことを鋭く自覚した上で君たちが「どういう存在としてそこに立つかが問題なのだ」というふうなことを言うんですよ。全教ゼミは、割合と、教師としての力量を上げようとか、良心的な教育をしようとか、教育という行為にあまり疑問をもたない、そういう学生がかなり多いでしょう。それに対して、真っ向から冷や水を浴びせたわけです。ほんの１、２分の短いスピーチでしたけれども、パンチが利いていてね。僕は、遠くから見ていて、激しい奴がいるなと思って、その時の印象はちょっと鮮烈でした。

翌日の晩、両派がぶつかり合う場面に出くわしました。運営をめぐってだったか、いわゆる「国民教育論」をめぐってだったか、争点はもう忘れたけれど、激しいぶつかり合いでした。僕は帰り際にちょっと覗いただけの会議でしたから、議論の中身などもう覚えていませんが、両方がはっきり色分けされていて、活動家というのはこういう仕方で「議論」す

るのかと、ただ、眼を見張るばかりでした。でも柔軟な部分もあるんですよね。かみ合っているなと思う部分もあるんです。杉尾敏明っていう名前の人をご存じですか。その頃は神戸大学の活動家で、全自連（全国学生自治会連絡会議）で論陣を張っていた。やんわりとですが見事に全学連派に反論をしたりしていて、それはなかなか面白かったです。

僕の周辺でも、活動家は急速に立場が分かれていきました。ただ、どのように分かれていったのか、プロセスは僕にはよく分かりません。村田栄一たちと『教育労働研究』を始めるのは、だいぶ後のことで、そのときはまったくつながっていません。僕の中では彼らは遠い遠い存在で、「向こう岸の人」くらいに思っていました。接触が生まれるのは、ずっとあと、唯物論研究会をやることになってからです。唯物論研究会っていうものは、もともとは共産党系の人たちの研究会だったわけです。「教育論部会を開こう」って言い出したのは矢川徳光さんです。「やりましょう」と僕が名乗り出て、部会として出発したわけです。ただそのときの運営委員会が反代々木系だったので、最初の呼びかけ人の矢川さんは参加しなかったし、五十嵐顕さんも現れなかった。代々木の人たちからはボイコットされましたが、幅広い立場の人が常連になりました。海老原治善さんと僕が世話人でしたが、津田道夫とか、倉石庸さんとか、五十嵐良雄さん、数学教育の野見隆介さんとか、領域的にも多彩なメンバーがいて、村田、津田、倉石といった人たちが新しいメンバーを芋蔓式に引き込んでくれたりしたわけです。元中核派の教師たち、そのときはもう党派には属していなかったと思うんだけど、野本三吉（加藤彰彦）とか武藤啓司さんのような人たちともそこで知り合って長く付き合うことになりました。はじめたのは、1965年頃だったかな。僕が大学院を出たばかりで、おそらく船橋にいた頃です。政治的な傾向としてはあらゆる立場の人がいて、しかしセクトを越えた議論ができていたんです。「村田栄一が来る」と言われたときは、「うわ、大変なやつが来るな」と思ったんだけれどね。研究会では国家論とか、近代公教育論とか、ナショナリズム思想とか、比較的ベーシックな問題領域を多くとりあげて議論してきたように思います。ぼくの問題関心は、かなりの部分、この会の議論の中で育てられたと思っています。

■史哲と教育社会学

そういうわけで、周りでは政治の季節が激しく泡立っていたんだけれども、ぼくはその渦の中に飛び込んだわけではありません。研究の上でも、中途半端でした。僕の場合は教育社会学ですから、教育学部の中ではちょっと毛色が違うんです。教育学ではなくて、どちらかというと社会学なんです。つまり、教育という政治現象も社会学の視点で捉えようという問題意識ですから、教育を外から見ることはあっても、教育実践そのものにあまり深入りしていないわけですよね。それがだんだんに変わっていくわけです。

直截に教育の問題に切り込もうとしている仲間から見ると、ぼくのスタンスは隔靴掻痒の感じがしただろうと思います。教育という行為を実践というよりも、むしろ現象として外から見るという傾向をかかえたまま学部を卒業しました。卒業論文のテーマは技術革新と教育で、労働現場で何が起こっているか、労働がどう変わり、労働力にたいする要求がどう変化しているかということに関心があったわけです。その後、大学院も技術教育史を勉強しました。技術教育史を勉強しているわけですから、実質的にはもう教育社会学の範疇をはみ出しているんですけどね。それで、大学院での教育社会学専攻はマスター２年で終わって、終わって、というか、もうやめてくれと内々に言われてしまいました。僕も地方に出たいという気持ちが昂じていました。それで船橋の市立教育研究所に就職したわけです。

大学院のゼミで中心的にご指導いただいた先生はいませんでした。本のレベルで参考にさせていただいたのは、細谷俊夫先生です。ただ、個人的な接触はありませんでした。細谷先生のお仕事は戦前のものですしね。堀尾輝久さんは教育社会学の、おそらく清水ゼミに来ておられたのではないでしょうか。大学院生レベルでは、史哲からも堀尾さんとか松野安男さんがよく研究室にいらっしゃっていたし、学部学生レベルでも交流が活発だったんですよね。僕らも史哲のほうには結構足を伸ばしていましたから。大田堯さんのゼミも、大学院に進学してからは出ています。勝田守一さんは教養学部で、こちらでは授業はされていなかったと思います。あと、あまり熱心じゃないけど、非常勤講師で来られていた鈴木秀勇さんの授業は一応出ていました。フランス革

命期の教育思想ですよね。あと、海後宗臣さんの日本教育史、これは必修ですから、学部時代に出ています。大田さんの教育学概論の講義も聞いています、これは面白かったです。持田栄一さんの授業ですか？　あまり出てないんですよね、１回ぐらい出たことがあるのかな。他の学科では、宮坂哲文さんの授業に熱心に出ました。教育方法論です、地味だけれど、ものすごく充実した講義だったんです。

ただ、学生は何かというと始終集まって議論をしていましたよ。勤評の討論とかね。学科討論というのかな、これはかなり頻繁にやっていました。それからあと、五月祭の準備。道徳教育を採り上げたのかな。そういう授業以外のレベルで学生たちが勝手にいろんなことをやっている。教育社会学も史哲もあんまり壁がなかったと思います。社会学の学生なんかも参加していましたし。

構造改革論争やグラムシへの関心ですか？　そのころまだありません、グラムシへの関心はだいぶ後のことだと思います。そうだ、人で言うと、有本良彦くんという人がいたんですよ。教養学部の地理学科から来て地理教育を専攻した人です。有本くんとはずっと一緒でしたね。大田ゼミでも一緒だった。その後国立教育研究所に勤めましたが、地理教育の分野でいい仕事をしています。早く亡くなりましたが、彼とは教科研（教育科学研究会）社会科部会も一緒でした。現場に密着し、自分も高校で教えたりした研究者で、すぐれた教材を多くつくっています。社会科部会に関わり始めるのは、船橋に勤めて２年目頃から、会の歩き始めの時期からです。

■唯物論研究会と教科研社会科部会

唯物論研究会は、東大でやっていたこととはあんまり関係ないんですよね。技術論には関心がずっとありましたから、それを勉強する場として唯物論研究会の技術論部会に行くようになりました。芝田進午さんとか、中村靜治さんがいてね。その延長で唯物論やマルクス主義の本をいくらか身を入れて読むようになりました。唯物論研究会は、芝田さんや寺沢恒信、大井正とか、あの辺りが中心でした。あと、元気な若手が結構いたんですよね、廣松渉とか、花崎皋平とか。

ちょっと後になるけど、田辺振太郎さんのところで言語論の勉強会をずっとやっていたんです。彼は病気で動けない人ですから、自宅に行って、月に一度ずつ、イエルムスレウの『一般文法の原理』なんかを読んでいたんですけど。唯物論研究会に参加していた時期と、教科研の社会科部会に参加していた時期はかなり重なっています。両方の問題関心を内在的につなげようとしていたんですけれども、うまくつながらなかったですね。教科研社会科部会は、その後独立して「社会科の授業を創る会」になり、今は「人間の歴史の授業を創る会」になりました。組織的に色々あったようですが、その辺の事情はよく分かりません。

教科研社会科部会は、当時の民間教育団体の中でちょっと独特でした。どちらかというと、数教協（数学教育協議会）に近かったと思います。気質的にタフマインドなんですよね。だから、生活綴方教師のごちゃごちゃした言説が大っ嫌い。「仮説実験授業」や「現代化」を主張した人の中には、そういう傾向が見られますよね。僕もそうでしたから。

研究会に行くと、目の覚めるような仕事が次々に披露されるんです。久津見宜子さんとか奥地圭子さんとか、それから日立の教科研とか。平べったい経験主義ややたらとイデオロギー臭の強い社会科授業にほとほとうんざりしていましたから、こうした人たちの仕事は新鮮でした。地球史や人類史の視点で人間とその文明をマクロに捉える授業に、僕は共鳴しました。だから、研究会にはよく行きました。白井春男さんが比較的近くに住んでいましたから、彼が自宅（塾でした）でやっていた授業づくりのサークルにもよく行きました。ドライな作業集団の雰囲気が魅力的で、一時期はかなり深入りしました。社会科部会が教科研から出て、「社会科の授業を創る会」になってからも、そのまま参加をつづけました。やめたのはいつごろだったのかな、かなり後になります。1970年代の終わりから1980年代に入っていたかもしれない。白井さんがカリスマ化して、これはもう付き合いきれないと思ったのです。それまでは年２回の大会に行くとか、出された実践記録はできるだけ読むということはやっていました。その後も、白井さんもふくめてですが、仕事や運動抜きのお付き合いは結構つづきました。

横須賀薫さんとは大学院を出た後は一向に接触がなかったのです。ずっと後になってから、タイがらみで１回、世話になったことがあります。1980年代の終わりか1990年代に入ってから、タイ東北部で生

活綴方に似たことをやれないだろうかと模索していたころですが、タイに一緒に行ってくれる生活つづり方教師はいないだろうかと相談して、山形の土田茂範さんを紹介してもらったのです。一緒に茂範さんのご自宅を訪ねてくれて、以後、茂範さんはタイの農村教師との交流ゼミに毎年足を運んでくれました。タイの学校の「作文」は国家語のタイ語で書かれるのが鉄則なのですが、子どもの生活語とずれているため、表現がぎこちないものになりがちなのです。せめて会話文だけは、土地の東北語で書いてみようよと、土田さんは呼びかけつづけました。

宮澤康人さんとは、大学院生時代はすごくよく話しました。当時清水さんのゼミでデュルケームを読んでいて、ゼミの後、学生食堂に流れてよもやま話に興じました。楠原彰さんとは、大学院時代の接触はないのです。顔ぐらいは知っていたけれども、在学期間がずれていて、直接に話した記憶がありません。あとね、すごく影響も受けているし、一緒にたくさんの仕事をさせてもらった人に、佐藤興文さんがいます。彼は僕を国学院に引っ張ってくれた人でもあります。大学院生のときに会って、それからずっと見守ってくれたのは佐藤興文さんじゃないかと思います。僕が学部の時に彼は大学院の四年生か五年生だったと思いますから、大先輩でした。その時はまだときどき噂を聞くだけの存在でした。

■1970年代の転換点―「学校論の周辺」

1980年代の前半、僕は民衆文化研究会、演劇ワークショップ、新日本文学会などの活動に没頭しました。中内敏夫さんたちと新評論から「産育と教育の社会史」を出したのも、同じころだったかもしれません。新日本文学には久保覚さんに引きずり込まれたという感じです。80年代の前半は、僕の中ではもう一つ違うエポックになるんですよね。1970年代を思い出そうとして、すごく分からなくなるんだけれども、その後の80年代は明瞭に違うんです。読書傾向も違っているし、行動もスタイルも違っている。交友関係もかなり違ったんじゃないのかな。

村田栄一さんとは、細々とですが、一貫してつながっていました。フレネ教育でも一緒でした。僕の方で誘ったり、向こうから誘われたりという感じですが。1970年代は『教育労働研究』にも色々書いています。村田さんとは基本的に問題意識がかなり近かった。ただ、僕が民衆文化研究会の方にのめり込んでいった時期は、接触がやや少なかったかもしれません。彼は若い教師たちとの付き合いに力をいれていました。

あまりちゃんと位置づけられていないけれど、1970年代の、彼の成田とのかかわり、とくに三里塚少年行動隊との付き合いは、彼の中でも大きい位置をしめているし、その後の日本の社会と学校を考える上でも重要じゃないかなと思います。彼は組織から離れ、おそらくその関係もあって最終的に成田から離れて学校の仕事に集中していくのでしょうが、そもそもの起点では三里塚でいつ逮捕されるか分からないという身辺状況があり、そういう事態も予想しながら、日ごろの教育実践の中で、子どもたちと濃密な関係を創出しようとしていたのではないでしょうか。そのあたりの彼に僕は深くはかかわっていないのですが、今になって、彼の書いたものをずっと振り返ると、「ああ、ここだな」と思います。この時期の彼の思索と実践は、突出したというか、時代を深く照射したものだと思っています。

僕が『教育労働研究』に書かせてもらった「学校論の周辺」という論文は、失敗作だけれども、自分の転機にはなっていると思いますね。フレイレを初めて読んだのもあの時点です。それまでずっと、唯研時代から1970年代まで、聖と俗という角度から公教育の問題を考えていました。文化の根底には、聖と俗の対立がはたらいていて、とりわけ教育には聖なるものに向かうベクトルが強くはたらいているのだけれど、つまるところ文化の革新は、その聖なるものを俗なるものの中に引きずり込んで、そこに新しい活力を与えていくことではないと、そんなことを漠然と考えたのです。近世初頭の民衆演劇や俗語文学に見られるそうした文化のダイナミズムが、今日のラテン・アメリカやアフリカの民衆文化運動にも垣間見られると感じたわけですね。フレイレはそこを捉えて言語化しているなと思いました。そのあと、アウグスト・ボアールとか、ラテン・アメリカ民衆演劇運動とか、僕の中で新しい出会いがつぎつぎに生まれました。それらに刺激されて、1980年代はラテン・アメリカのほうに遮二無二突っ走ってしまうんですけれども、そのきっかけになったのが、やっぱり「学校論の周辺」だったんじゃないのかな。

イヴァン・イリイチは、それよりもうちょっと前に読んでいたかもしれません。『脱学校社会』の仏訳

本を手にいれていましたから。偶然なんですよ。偶然、銀座の洋書屋で、ペンギンのシリーズにフレイレの本を見つけるんですよね。『*Cultural Action for Freedom*』や『*Pedagogy of the Oppressed*』もありました。そういうのが目に付いて、ぽっと買って、フレイレがどういう人間かというのも全然知らないで読み始めて。これは面白いなという感じで、次々、フレイレの本を読んで。そうすると、イリイチの他の本も視野に入ってくるし、それからエヴェレット・ライマーの『*School is Dead*』とかね。あれは全部、同じ叢書で文庫に入っているでしょう。それらを何か夢中になって読んでいたんですよね。それから、その頃、偶然といえるかどうか分からないけれど、カルチュラル・スタディーズの先駆になるような仕事がたてつづけに出ていました。「学校論の周辺」でも引用したと思うけど、G・H・バントックとか。イギリス・ルネサンス期のシェークスピア研究家で、T・S・エリオットの影響をすごく強く受けています。どういう背景からシェークスピアが登場したのか、それはどう「読まれた」のかということをずっと論じていて、それと今の識字文化の危機をどう乗り切るかという問題意識とが重なっていると思います。レイモンド・ウィリアムズがちょうど出てくる頃ですね。つまり、イギリスもやっぱり沸き立っていたわけですよね。イギリスが沸き立っていて、ラテン・アメリカがそういう状況でしょう。そこに北米の新しい教育社会学が入ってくる。ですから、1970年代というのはすごく刺激的だったんです。どの動きも「1968年」のインパクトを受けています。

■國學院大学での経験

落差が大きいんですけどね。つまり、日常生活の部分では、今と似たような、どうしようもない状況がどんどん生まれてきているわけですよね。1970年代後半は、結構きつかったです。教室の変化がきつかった。共通一次試験が始まったのは1979年ですね。教室の雰囲気が全然違うんですよ。1970年代前半が、また逆にすごかったんですよね。かなり緊張して教室へ臨むという日々でした。学生の問題意識がものすごく先鋭で、質問やコメントの形でものすごい球を投げ返してくるんですよね。

転換は、1970年代半ばでしょうね。１世代代わると、本当に、あっという間に変わります。短い間なのに、激しい変化でした。楠原彰さんが國學院大學に来たのはそのころ、1970年代後半です。ぼくがフランスにいたときに、彼はもう國學院の専任だったから。

僕と一緒に國學院に赴任したのは中内敏夫さんです。その前に竹内常一さんが行っていて、だから、竹内さんはかなり古株です。竹内、佐藤、中内がいて、僕は、それよりずっと年下で、本当にまだまだチンピラという感じでした。「すげえ先輩がいるな」という感じで彼らを見ていましたよ。とりわけ中内さんは、あの頃、ものすごい馬力で仕事をしていましたからね。中内さんとはよく話しました。今と違って、教員の部屋は小さい合同研究室が、一つしかないんですよ。本棚の前に向かい合わせのソファがあって、だから、そこでしゃべるほかないわけです。会えばいろんな話をしていて。竹内さんと中内さんが話していると、ほとんどは民間教育運動の話でしたね。僕は分からないから、ただ聞いているだけ。佐藤さんがいて、時々口を出すという感じで。ただ、いつも若手が勢ぞろいしているわけじゃないから。村田忠三さんとか、後藤豊治さんとか、ちょっと年配の先生方もいて、結構にぎやかな研究室だったんですね。

にぎやかなんですけれども、ただ、國學院大學の中で教育学研究室はすごく異質なわけですよね。学内で迫害されたり、疎外されていたわけではなく、結構よくしてもらっていたと思いますが、ちょっと外の廊下に出ると、「ひもろぎ(会)」っていう右翼の集団が自治会（革マル）や民青の学生を追い回しているような、そういう雰囲気でした。「ひもろぎ」という学生の右翼連合があって、「建学の精神」をふりかざして、学生団体ですが大きな力を持っていました。1960年代から1970年代の初めにかけて、他の大学で全共闘（全学共闘会議）が大学闘争をリードしましたよね。よく似た雰囲気なんだけれど、ただ、國學院の場合は、全共闘に相当するのが右翼なんですよ。彼らは左の連中よりももっと露骨に暴力的ですから、何かしらテロめいたことがいつも起こっているわけです。それにどう対処するか、どう処置するかっていうことで、教授会では厳正な処置を要求する教員と、ヒモロギ寄りというのかな、「粛学」派の教員とがいつもいがみ合うという状況でしたね。そういう泥沼めいた学内政治を冷やかに見ながら、おそらく学内・学外の動きに触発されてでしょうが、

時代感覚をとぎすましている一般学生の層も厚くて、教室には、そういう人たちがちゃんといるわけです。僕などは彼らの存在にささえられて、なんとか教員としてやってこれたのかもしれません。

よかれあしかれ、そういう状況が少し収まるのは、やはり1970年代の後半なのかな。1970年代の前半は、そういうわけで、ちょっと大変でした。そうこうするうちに中内さんがいなくなって、その代わりに楠原さんが入って、研究室が少し若返った。あの頃、中内さんや竹内さんが話していたことを僕がちゃんと受け止めていれば、民間教育運動のことも少しは分かったのだと思いますけれども。正直言って、当時の僕は全然興味がなかった(笑)。日本浪漫派がらみの関心で、東井義雄などは読んでいましたけど。

その少し前、1960年代には北一輝研究会をやっていました。その頃、フランス哲学の竹内芳郎さんがいて、彼とかとね。三橋くんも来ていたし、学外者が多かったですね。いわゆる民族派の思想を、テクストにそくして批判的に読もうということでした。でも、この研究会はあまり長続きしなかった。当時の國學院は、地の利がよいからでしょうか、そういうちょっとした読書会があちこちで開かれていました。語学研究室では、長年ダンテを読んでいましたし、フェルディナン・ド・ソシュールなども読んでいましたね。丸山圭三郎さんのような学外の研究者も参加していました。

■太郎次郎社および『ひと』との関わり

太郎次郎社（現・太郎次郎社エディタス）の浅川満さんとは、教科研社会科部会の合宿で知り合いました。社会科部会の最初の実践記録は、浅川さんの所で本になっています。浅川さんは僕にも色々目をかけてくださったようです。麦書房や一ツ橋書房を経て、本郷に机一つぐらいの小さな事務所を構えて、それを「太郎次郎社」と呼んでいたんですよね。浅川さんはこの太郎次郎社から僕の本を出したいということで、いろいろアドバイスをしてくれたんですけれども、僕は及び腰で逃げてばかりいました。広く読んでもらえるような内容とスタイルを自分がまだ獲得していないことは明瞭でしたから。その後『(月刊) ひと』(太郎次郎社) を出したときも逃げていました。『ひと』に最初から関わっていたわけではないのです。

編集委員になったのはずっと後です。みんながいなくなって、もう誰もやる人がいなくなって（笑)。関係はありましたよ。よく知っている人たちが始めた雑誌ですから。応援してはいたけれど、最初のころの『ひと』は勢いがよくて、僕がでしゃばる必要はないと思っていました。大学の講義で手一杯でしたし、金嬉老の裁判にかかわっていたこともあって、実際問題としてちょっと無理だということもあってね、傍で見ているだけでした。ですから初期の、大きく盛り上がっていた時代の『ひと』を、僕は体験していない。

太郎次郎社には関わっていたんですよ。1980年代に遠山啓さんが亡くなって、それから白井春男さんとそのグループが去って、板倉聖宣さんもいなくなって。でも僕は『ひと』の柱は、やっぱり授業記録だと思っていたんですよね。どういう事情があるにせよ、そこが手薄になるのは、雑誌としてすごくまずいなと思ったんです。力のこもった授業記録を継続的に出していかなければいけない、その下地となる自前の研究会をつくらなければならない、というようなことを浅川さんに言ったんですよね。

それで、1980年代から「授業の広場」というミーティングを月に１回始めました。最初は人がものすごく多かったんだけれども、すぐにいなくなるんですよ。ブームみたいに、わーっと人が多くなって、すぐいなくなるので、残ったのは、鳥山敏子さんと、それから木幡寛さんと、あと何人かの若い人たちですね。結局、鳥山さんと木幡さんの授業がかなり息の長い実践記録になって連載されました。鳥山さんの原発の授業は、５、６回連載になりました。それから木幡さんの長編の川の授業ね。僕は、二つとも二人の代表的な実践だと思うけれども、それが結実したわけですよね。だから、「授業の広場」をやった意味はあると思います。

ただ、やりたいことは、もっと他にもあったんですよね。例えば、最初の集まりで、「柳田国男の社会科をやろう」って言う人がいて、これは素晴らしいと思って、僕は乗ったんですよ。木幡さんも一緒に市ヶ谷の教科書センターへ行って、柳田国男の教科書のコピーを取って、さて、やろうとしたんだけど、言い出しっぺの人が来ないのね。柳田国男に心酔している人らしかったけど、何か誤解していたようですね。『ひと』っていうのは柳田国男みたいなのを相手にしないんだという、そんなふうに勝手に思い込ん

でしまったみたい。でも、柳田国男に取り組んでいれば、きっと新しい展開が開けたと思うんです。柳田国男の心酔者とは違った目で、柳田国男の社会科教科書をもう一度再検討できたと思います。

大事な示唆がいっぱいあると思うんです。例えば、「一人前、一人前」とよく言うけども、柳田の教科書をよく読むと、彼は一人前を相対化しているんですよね。人生の中には一人前じゃない時期があるんだということをすごく強調しているんですよ。一人前の時期は人生の一部で、その前後に一人前じゃない時期があるんです。そのトータルとして人生を考えるという、そういう視点がしっかりあるし、読んでいくと考える材料がたくさんあるんですよね。

このころのサークルで毎回検討したのは、木幡さんの川の授業でした。彼の川の授業は、要するに近代化批判なのです。川というのは、沖積平野に来ると曲流して、くねくねと蛇行するのが本来の在り方です。しかし近代の河川工事は、堤防を強固にして、河道を真っすぐにすげ替えてしまうわけですね。たしかにそれで耕地は広がるし、洪水も少なくなるだろう。しかしそのために川も土地も疲弊していくではないか、大地は貧しくなっていくではないかというのが木幡さんの授業の基本メッセージだと思います。ところが柳田国男の教科書はむしろ近代の治水思想を擁護しているんですよね。川が蛇行すると、不潔な水たまりができる、病気がはやる。そういうアンチテーゼになるような事実がいろいろ書かれていて、けっこう面白い討論材料になったと思うんです。

８年に遠山会館ができ、そこを有効に利用しようということで、浅川さんは遠山会館運営委員会というのをつくりました。どういうわけか、彼は『ひと』の編集じゃない人間を集めたみたいですね。新聞記者とか、若手の物書きとか、主婦とか、大学院生とか。それで、いろんなイベントや講座を企画した。タイツアーも、もともとは遠山塾の企画だったんですね。一年間東南アジアの勉強会をもって、どこかの国に行って、主として農村を歩いて、そのあと授業をつくるということが当初の目的でした。行先もタイに決めていたわけではない。

そんなわけで、『ひと』の編集に直接にかかわるということはなかったのですが、太郎次郎社との関わりはそれなりにあったのです。『ひと』の発行部数も、まだかなりあって、手を広げる余力もあったのですね。

初期の『ひと』は、民間教育運動を総結集するようなところもあったでしょう。僕は80年代の末までは、たぶん１、２回しか原稿を書いていないと思います。もっぱら、雑誌の周辺のプロジェクトに参加していたのです。

■『ひと』の編集委員になって

編集委員にかかわるようになったのは、1980年代の終わりぐらいですね。あれはなぜなんだろうな。要するに、しんがりなんですよね。ブームは去って部数が下がって、もう一時期の華やぎはなくなっていた。教育雑誌っていうのは、特に父母は、子どもが大きくなると読まなくなるでしょう。世代交代にともなう自然減もあるわけです。それから、教師もだんだん関心が薄くなる。それでジリ貧に部数が減ってきたのでしょうね。そこで浅川さんは、僕みたいなちょっと色合いの違った人間に声をかけようと思ったんじゃないでしょうか。

けっして向う受けのする企画ではないけれど、1980年代後半の『ひと』は、結構いろんなことをやっていると、僕は思っているんですよ。それまでと少し違った特色を出していると思います。開発教育(「国際化って何？」)とか、自然観の問題とか、多様な家族とか、歴史教育の特集も連続して２回ほどやったんです。「歴史離れの時代に　歴史の授業を考える」っていうのと「歴史の授業を考える　歴史離れの時代に」と、タイトルとサブタイトルを入れ替えてつづけて２回、歴史教育の特集をやっています。あまり反響はありませんでしたが、民間教育運動とはやや角度の異なる『ひと』ならではの投球であったと、僕は自負しています。

編集委員は交代制にすべきだと僕は思っていたので、このときは１年たらずしかやっていないと思います。７、８カ月全力投球で関わって、そのあとを藤本卓さんにバトンタッチしてもらっています。竹内常一さん、佐藤学さんと三人が代表編集委員を担当するのは一番最後の段階です。１年ぐらい続いた。もうちょっと続いたかしら。波多野誼余夫さんだったかな、「最近の教育学者は面白くなっているから入ってもらったほうがいいよ」というアドバイスを、浅川さんにしたらしいんですよね。それで佐藤さんや、佐伯胖さんに編集委員に入っていただいたよう

なのです。

面白い編集委員会でしたよ。それぞれの持ち味が出ていて。僕が印象に残っているのは、「学校に出没する　変なおじさん・おばさんたち」という特集号ですね。学校を開くということは、そういうことなんだな。学校をコミュニティの広場にしてしまった習志野市・秋津の市民の運動は、その後、地域づくりの一つのモデルになりました。それから80年代の末ですが、教育技術法則化の批判をやったんですね。あれは1980年代の末かな。２回やったんですが、僕は２回目のほうにかかわった。かなり気合を入れました。あれは、民間教育運動が教育技術の法則化みたいなところへ落ち込んでいくことに対する、いら立ちの表現ですよね。

■自由の森学園とフレネ教育運動

自由の森学園にも関わりました。僕はいつもそうなんだな。発足にはあまり関わってないんです。出発してから、研究協力者というかたちで関わり始めているわけですね。もともと僕は理想の学園などというものを信じてはいませんでした。「そういう期待で学校をつくるんなら、やめたほうがいいよ」というのが僕のスタンスでした。

できてみたら、案の定というか何というか、大変な学校なわけですよ(笑)。点数序列がない、校則の締め付けもない、となると、それまでの抑圧の反動が一気に吹き出してきますよね。それとの悪戦苦闘が始まるわけですよ。その中で教師は悩んで、でも、なんとかその現実を乗り越えようと悪戦苦闘する。生徒たちの中にも期待するだけではダメで、自分たちの力で学校をつくっていく以外にないと思っている生徒たちがかなりいます。彼らに共感して、これはとことん付き合おうという気持ちになりました。今も細々とですが、かかわりを続けています。もうそろそろやめようと思っていますけど(笑)。社会科を中心に、他の教科もちょっとずつ口を出したりしています。後半は評議員をやったり理事をやったりで、経営にも深入りした。リデフ(Rencontres Interenatinales Des Educateurs Freinet) と呼んでいるフレネ教師の国際集会は、98年に自由の森でやりました。木幡校長の時代でした。

フレネがらみの教師集団は日本には二つあるんです。一つはもちろん、フレネ研究会ですね。それからもう一つは村田栄一さんが中心になったグループで、フレネ教育運動の影響を受けているんだけど、フレネ教育に特化はしていない。フレネ方式をそのまま持ち込んでも日本の公教育の中での運動にはなりにくいと考えるわけです。私は両方に中途半端にかかわっています。フレネ教育研究会には参加はしていませんし、会員でもありません。ただ、原稿や翻訳はときどき寄稿しています。フレネ自身の文章は、こちらの機関誌に投稿したものが多い。二股かな（笑)。

フレネ教育研究会の方は、フレネの思想と方法を正面から研究して、とりこもうとしています。村田さんたちの現代学校運動JAPANの方は、何をやっているか分からないです(笑)。フレネ教育を名乗るということも、していません。現代学校運動と称していて、福島との交流をやったり、ものづくりをしたり、その都度いろいろなことやっています。こちらは私も、消極的にですが、一応はメンバーなんですよね。

日本でのリデフは現代学校運動のメンバーが中心になって担いましたが、それぞれのアトリエは両方のグループの人たちが一緒に参加してやっています。全面的な共催を申し出たのですけども、研究会としては参加してもらえませんでした。研究会の中でどういうことになったのか僕はよく分からないけれど、参加する人としない人と両方。参加した方は個人として参加されたんじゃないかと思います。

フランスにも、フレネ派から分かれた「制度のペダゴジー」というグループがあります。僕自身は、どちらかというと制度のペダゴジーに関心がありました。制度の教育学のバネとなったのは、何といっても1968年５月です。あの中で、学校制度とか医療制度に対して若者たちがラディカルな異議申し立てをしたわけですよね。既存の制度に同化することを拒否して、制度を自分たちで実践的に脱構築いくということで、その道筋を探求する運動でもありました。反精神医学や労働現場での自主管理運動なんかにも、これがつながっていくわけです。

制度のペダゴジー・グループと大喧嘩したフレネ本人は、５月の時点ではもう生きていませんでした。面白いのはエリーズ・フレネで、５月の運動にものすごく共鳴しているんですよね。エリーズ・フレネという人はすごく複雑な人だと思います。フレネを共産党に誘ったのはエリーズ・フレネですけれども、

同時に、５月にも共鳴をしていて、フレネ教育学の本もそうですけど、制度の教育学の重要文献もほとんどマスペロ出版から出ていますよね。そういう動きを推進したのも、恐らくエリーズだと思うんです。

ですから、単純に党派で考えてはならないと思います。今ではフランスでも二つのグループの相互乗り入れが進んでいるようです。

組織対立ということでいうと、フレネ教師の国際組織であるFIMEM（Federation Interenationale des Mouvements de l'Ecole Moderene 現代学校運動国際連盟 RIDEFの主催団体でもある）のメンバーには、フランス中心主義に対する反発が結構根強くあるんですね。とくにイタリアの教師の間で、それが強い。いろんな要因が絡んでいると思うけれど、フランス・フレネ運動が自分たちの教材をイタリアにそのまま持ち込もうとして、激しく反発された、という過去があるようです。ヴァンスのフレネ学校をモデル視することにたいしても、強い反発があります。言語的に近いだけに、かえって、そういう摩擦が生じやすいのかもしれません。ただし、これを単純にナショナリズムでくくるべきではないでしょう。

イタリアの教師は、フレネ教育を何よりも「テクニック」として受容しました。それゆえに、テクニックや「方法」を相対化し、方法への過信を警戒する傾向も強いようです。

憶測になってしまうのですが、モンテッソーリはその点でイタリア・フレネ運動の反面教師になっていると、僕は思います。自分の方法を普及させるためには、ムッソリーニとさえも手を結んでしまう、あの彼女の方法への過信にたいする批判です。モンテッソーリへの共鳴はあるんだけれども、あれはやりたくないという、何かそれに近いものがあるんじゃないかなと、僕は見ていて思うんだな。

■質疑応答

小玉：今のお話全体を通じても出ているんですけど、聖と俗という、あるいは日常と非日常というところで、学校という空間の非日常性、それらの絡み合いのダイナミズムみたいなものにはもともと関心があって、それが1980年代・90年代の民衆文化論であったり、フレイレの思想だったり、あるいはフレネだったりということと結び付いてきて、今の先生のお仕事の総体を成しているというところは分かったような気がします。今後の展望として、「声の文化と文字の文化」という言い方がよくありますけれども、先生のご議論の中では、文字というものに対するこだわりも一方であって。それが、民衆文化やアジア・アフリカに学びながらということと、どうつながっていくのでしょうか。

里見：それを一番に考えたいと思っているんですけどね。

佐藤：やっぱり、この間おっしゃっていたイタリアっていうのが鍵ですよね。

里見：イタリアだけじゃないかもしれないけど、イタリアには面白いものがありそうな気がしますね。ここしばらく、『ピノッキオ（の冒険）』（カルロ・コッローディ著）なんかをまた読んだりしてね。あれ、面白いですね。19世紀、1881年に出ています。77年のコッピーノ法で強制義務教育の体制が強化され、79年には成人向けの識字学校も開設される、そんな時代で、アミーチスの『クオーレ物語』の背景になった年でもあります。ピノッキオという少年は、ほんとにもうしょうがない子でね。何度も何度も後悔しながら、また同じような脱線をやらかす。あれは、人形劇や仮面劇の道化ですよね。

江口：民衆文化や土着的なものへの関心は、1960年代末以降のご関心の一つの表れだと思います。同じ頃、大田堯先生が習俗研究みたいなことを言われて、柳田国男のことを書かれ始めた。そうした議論と、里見先生の立場というか議論の展開というのは、どう重なったり違ったりしているのでしょうか。

里見：大田先生のような形の仕事はできていないかもしれませんが、重なっているのかもしれませんね。重なりはあんまり意識していません。大学での講義は聞いていますし、それ以後のお仕事も読んだりはしますけれど、重なりはそんなに意識していませんね。意識しなさ過ぎるのかもしれない。

小国：習俗調査研究って、大田先生は大学のゼミでずっとやっていらっしゃいますよね。

里見：やられていましたよね。中内さんなんかもやられたようですよね。

小国：先生は、そこには参加はされていないのですか。

里見：参加していません。アリエスの社会史やウォルター・オングの言語文化史研究などを媒介にして、中内さんのお仕事とあらためてつながり直したい

うことは言えるかもしれません。フォークロアや民俗文化への関心は、断続的につづいてはいるのですが。

佐藤：『ボクらはへなそうる（探険隊―自然の中で夢を育む北上の子どもたち）』（斎藤桂子、河崎道夫・編著／ひとなる書房）という、北上での空想遊びの保育実践の本がありまして、あれもやっぱり聖と俗の軸は明らかにありますよね。私が小さい頃、本当に田舎の農村の、私と同世代の人で50年昔みたいな所で育っているので、近所のおじいちゃん・おばあちゃんたちが、ああいう昔話と一緒に怖い話とかをしながら、あの世界に連れていってもらっていたなと思って。あそこの川には何が出るとか、そういう。

里見：自然がやっぱり怖いんですよね。ちょっと怖いんです。そんなに簡単に片付けられない不気味さがあって、そこへ踏み込んでいくわけだけども。

佐藤：科学とか文明って、怖さを抹消していくものじゃないですか。

里見：末梢していきますからね。ちょろちょろっと処理できるから。

佐藤：でも、そこでそれを抹消してしまったら、想像力が働かなくなりますよね。未知のことが起こったときに、対応できない頭になるという。

里見：そうですよね。保育実践の中で、そういう切り口を出している実践が結構あるんじゃないですか。

佐藤：本とか活字になってなくても、現場レベルでは無数にあると思うんですよね。あと、保健室とか。「先生、おなかが痛い」って行くと、「あ、がんだ」とかっていう、あれも似たようなものがありますよね。

里見：モンテッソーリだって、もともとはそうなんだ。彼女は医者ですよね。若い医者で、子どもの身体と付き合って。最初の現場はローマやミラーノのスラムでしょう。

佐藤：労働者階級の子たちですよね。

稲井：僕が戦後史を調べたときに、里見先生が、1964年頃に『後期中等教育をすべてのものに』（高生研の機関誌）に文章を書かれていました。大した関わりじゃなかったらいいんですけど、どうして関わられたのでしょうか。

里見：それは、竹内さんに勧められて書いたんじゃないかしら。

小玉：高生研（全国高校生活指導研究協議会）そのものはだいぶ後ですか。先生が高生研と関わるっていうのは。

里見：ええ、だいぶ後ですね。関わるっていうほど関わっていないと思うんですけれど、時々、原稿を書いていましたね。

小玉：それは、やっぱり竹内先生を介しての関わりっていう感じですかね。

里見：最初はそうですね。それから、佐藤さんたちと後期中等教育の問題をつついていたから、それを反映するようなものを書けと言われたり、そういうことはあったと思います。

小玉：なるほど。じゃあ、これをもちまして聞き取りを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

（終了）

【付記】

本インタビューは、「史哲の歴史」研究会が主催し、2015年３月24日（火）10：00～12：00（於東京大学教育学部棟・勝田研）にて行われた。「史哲の歴史」研究会は、小玉教員、小国教員、院生有志で2014年11月より開かれている私的な研究会であり、基礎教育学コースの前身である史哲研究室（教育哲学・教育史研究室）及び東大教育学部が日本の教育学研究の中で果たした役割を検証することを目指し、文献講読や聞き取りを行っている。今回聞き取りにご協力下さった里見先生には深く感謝申し上げたい。

（江口怜）